

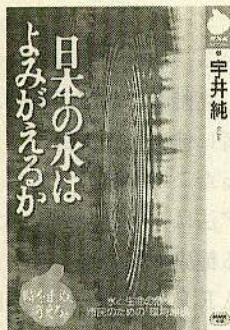
書

評

『日本の水はよみがえるか』

宇井 純著 NHK出版 定価1000円 317頁

天 谷 和 夫 (群馬大講師)



表題だけを見て受ける印象は「日本の水環境の客観的分析と将来予測」であるが、内容は今日の日本の水環境をもたらした政治的社会的背景を明らかにし、それに対し我々が

改革の行動を起こさなければ日本の水はよみがえらない、という命題を我々に示したものと考えられる。著者のこれまでの身を持って体験したことからはとぼしり出る問いかけであり、水問題に限らず日本の環境問題のすべてに共通する課題である。内容構成ともに簡潔で要を得ている。

内容について目次に沿って簡単に説明すると、第1章では自分の仕事を振り返ってのまとめ、第2章では水の不思議な性質、第3章は地球上における水の大循環が我々の生存の基盤である生態系を支えており、これが人類の活動によって乱されているのが水環境問題であると大きくとらえている。第4～7章では水を通して起こった環境問題の具体例として日本の足尾鉍毒事件、イタイタイ病、水俣病、PCBによる広域海洋汚染による問題をとりあげている。8、9章では日本における河川、湖沼、沿岸、地下水の問題をとりあげている。第10章では日本の業界、官界の癒着の象徴ともいえる問題の多い下水道問題をとりあげている。第11章では著者の現地主義を实践した沖縄での取り組みが書かれている。最後の12、13章において、状況の変化、特に地球規模の環境問題を視野に入れて取り組まねばならない状況の中で、環境科学を市民と共に発展させながら、最も身近で重要な水を通して我々の生き方、行動を考えていこうとむすんでいる。

印象に残った点をいくつか述べる。日本の政

治、社会の大企業の利益優先の構造はいろいろな場面に現れるが、最近のエイズ問題で明らかになったように、学者、専門家がこれに深く関わっており著者は専門家の立場から、これと同じ様なことが水問題においても存在する事を指摘している。例えば水域における汚染のアセスメントや規制基準の設定、下水道の問題などである。そしてこれらを改めるには、それらに関与した行政官や学者の責任を具体的に追求する必要があると指摘していることである。

私の関係する大気汚染についても同様な事があり全く同感である。行政が本来の役割を果たすよう、また専門家がその社会的責任を自覚してそれに協力することが望まれる。このように一部の技術官僚や専門家に任せてきたことによって引き起こされた様々な問題は、市民が自主的に学習し、賢くなることによって解決していく展望が生まれる。著者が東大時代に行った自主講座は、在職中公害の講義を依頼された時政治的な側面にふれないようにと制限が加えられた事に抗議して始められたものであることをこの本で初めて知ったが、一度閉じたこの講座が最近学生たちによって再び自主的に始められた事が書かれているが、これは明るい展望を伝える事例である。各地域、大学などでこれをならって広げるべきことであろう。この他著者が今までの仕事を振り返り、反省もこめて率直に書かれた本書は諸問題の本質を理解させるに十分な内容を持っている。環境問題を技術的なせまい問題にとらえがちな技術者、研究者にこの問題を社会的側面も含めて総体的に捉えることの重要性を理解させる上で役立つだろう。また、環境問題に取り組む一般市民にとってもわかりにくいために放棄してきた専門的な知識の学習の重要性、専門家だけにまかせてしまう危険性を知る上で重要である。是非一読をすすめる。